国家基本問題研究所　第２回「寺田真理記念　日本研究賞」に２氏

真の理解者育て　歴史問題の誤解解く

今日の日本が直面している憲法、安全保障、教育をはじめとする国家的課題に取り組み、日本再生に向けた活動を行っている民間シンクタンクの公益財団法人「国家基本問題研究所」（櫻井よしこ理事長）が、外国人による優れた日本関係研究を顕彰、奨励する第２回「国基研『寺田真理記念　日本研究賞』」の受賞者を選出した。

櫻井よしこ
国基研理事長

田久保忠衛
国基研副理事長

「寺田真理記念　日本研究賞」は、連綿と続く日本文明を誇りとし、広い国際的視野に立って日本の在り方を再考する国基研の活動に寺田真理氏が共鳴し、篤志として寄付された１００万ドルを原資に昨年、創設された。

対象となるのは若手、中堅の外国人研究者で、政治、経済、安全保障、社会、歴史、文化の各分野で日本に対する理解を増進する研究に対し、日本研究賞に１万ドル、奨励賞には５千ドルが贈られる。過去５年の間に刊行、発表された日本語か英語による作品から選出される。

第２回の日本研究賞に、20世紀を代表する彫刻家で建築、造園、インテリアの分野でも活躍した日系米国人のイサム・ノグチを産み、育てたレオニー・ギルモアの生涯を追ったエドワード・マークス（米国）・愛媛大学准教授を選出。

奨励賞には、日系人でミクロネシア連邦の初代大統領となったトシヲ・ナカヤマの足跡を研究したデイヴィッド・ハンロン（米国）・米ハワイ大学教授を選んだ。

櫻井理事長は「国際理解を深めるに当たり、日本に対する数多くの誤解があり、なかでも歴史問題に関する誤解は根深く、大きな壁となって立ちはだかっています。誤解を解くためには外国人に日本を理解してもらうことが重要です」とコメント。

さらに「相互理解を進めるためにも、日本についての研究を行う人材を発掘、育成したいと考えていたところ、国際的な役に立つようにと、寺田真理さんからご厚志をいただきました。この賞によって日本の真の友人が国際社会に増えていくことを心から願っています」と心を寄せる。

田久保忠衛副理事長も「日本に座標軸を置き、世界の中でどの位置にあるのかを求める姿勢が重要。ラフカディオ・ハーンや詩人で駐日仏大使だったポール・クローデルは世界的な文明の視点を持ち、日本研究の代表的存在。本格的な外国人の日本研究者を見つけ出し、彼らの成果をどんどん発表していく必要がある」と賞の意義と展望を説明する。

■選考委員
櫻井よしこ・国家基本問題研究所理事長（委員長）
田久保忠衛・国基研副理事長（副委員長）・杏林大学名誉教授
伊藤隆・東京大学名誉教授
平川祐弘・東京大学名誉教授
渡辺利夫・拓殖大学総長
髙池勝彦・国基研副理事長・弁護士

来月８日に記念講演会

第２回国基研「寺田真理記念　日本研究賞」受賞者、エドワード・マークス氏による記念講演会を開きます。

日時　７月８日（水）午後６時半～８時半（開場５時半）

場所　日経ホール（東京都千代田区大手町１の３の７　日経ビル３階）

会費　３千円（一般）、１千円（国基研会員）。当日会場でのお申し込みはできません。

申し込み方法　【講演会参加希望】と明記の上、氏名（国基研会員は会員番号も記入）、郵便番号、住所、電話番号を記載し、はがきもしくはＦＡＸでお申し込みください。参加券を発送いたします。定員（５００人）に達し次第締め切ります。６月26日（金）必着。〒１０２－００９３　東京都千代田区平河町２の８の10　平河町宮川ビル３階　国家基本問題研究所　ＦＡＸ０３・３２２２・７８２１。

日本研究賞

愛媛大准教授

エドワード・マークス氏

日米をつないだ女性の一代記

愛媛大学で英米言語文化論を研究するエドワード・マークス氏は、米ニューヨーク市立大学大学院で英語学の博士号を取得し、京都大学で客員講師を５年間務めた経歴を持つ。２００４年に最初の著書としてカナダのトロント大学出版から『アイデア・オブ・コロニー　現代詩のクロス・カルチャー』を発表するなど、詩歌をはじめ複数の文化、言語、社会的背景をもった現代英語による文学作品の研究などを進めてきた。

「日本研究賞」の授賞理由となった『レオニー・ギルモア　イサム・ノグチの母の生涯』（彩流社）は、世界的彫刻家、イサム・ノグチ（１９０４～88年）の父で詩人として日米で活躍した野口米次郎（１８７５～１９４７年）に向けた20年近くに及ぶ研究から生み出された。一昨年に英語版として出版された『When East Weds West』（東西が結婚するとき）の日本語版で、原書と同時進行的に翻訳が進められた。

本書は米次郎から英語の校正を依頼され、イサムの母となるレオニー・ギルモア（１８７３～１９３３年）の生涯をレオニー、レオニーの両親や恩師、イサム、米次郎らの手紙、未発表を含む彼らの著作などを交えて詳細につづる。

膨大な資料を詳細に検証し、綿密に組み上げられた一代記は、冷静な視点にレオニーらに対する尊敬と情愛の念をにじませる。日本人排斥運動の嵐が吹き荒れる米国でシングルマザーとしてイサムを産み、日本に来ては米次郎に女性として裏切られるレオニーの心模様を精細に示して味わい深い。

選定に当たった田久保副理事長は「収められているおびただしい数の手紙そのものが優れた文学作品。それを厳選するだけでも第一級の仕事だが、いくつもの材料を集めて国際情勢のトレンドを証明するような社会科学的手法にも目を見張るものがある。学問的な香りの高い作品で、男女や家族の在り方を通して裏から見た日米関係を鮮やかに示している」と評価する。

奇跡的な読者存在

《受賞の言葉》寺田真理記念　日本研究賞をいただいたことは、私だけでなく、多くの時間を調査と執筆に費やした関係者すべてに対する激励となりました。

いわゆる学術的な本作りというのは難しく、況んやそれが実際に読まれ、評価を受けるのは大きな奇跡である。だが、日本研究賞は奇跡的な読者が存在し、われわれが調査や執筆に費やす努力を評価する人々がいることを思い起こしてくれました。

《講評》田久保忠衛・国家基本問題研究所副理事長

本書に描かれたレオニー・ギルモアに知的水準の高い、人生のけじめ、けじめに自分で決断する米国女性の一典型を見つけた思いがした。

マークス氏は詳細に、このアメリカン・レディーの生きようを辿っていく。材料は残されている膨大な量に上る手紙、随筆などレオニーが書いたもの、それに対する肉親、恩師、米次郎、子供たちからの返事である。

米次郎、イサムがあまりにも有名になっている中で、日米両国間において自分の人生を貫いたレオニーを描き上げるうえでの社会科学的手法とも考えられる学問的追跡はまさに日本研究賞に値する。

奨励賞

米ハワイ大教授

デイヴィッド・ハンロン氏

ミクロネシア建国の父に迫る

米ハワイに研究拠点を置き、鹿児島大学でも教壇に立ったデイヴィッド・ハンロン氏は、１９７０年からミクロネシアをはじめとする太平洋諸島に足を運び、オセアニア地域も含めたアジア太平洋地域の歴史や文化、社会の変遷と現状を見つめてきた。

奨励賞の対象となった『Making of Tosiwo Nakayama』（ハワイ大学出版）＝ミクロネシアをつくる　トシヲ・ナカヤマの政治的経歴）は、１９７９年にミクロネシア連邦を独立させ、初代大統領となった日系ミクロネシア人のトシヲ・ナカヤマ（１９３１～２００７年）にスポットを当て、日本による委任統治時代に端を発する国づくりの変遷を追い、未来の姿をも見渡す。

１９４８年生まれ。米ホーリークロス大学を卒業し、84年にハワイ大学マノア校で博士号（太平洋諸島史）を取得。「太平洋諸島研究シリーズ」編集長、太平洋諸島研究センター所長などを歴任。ハワイ大学マノア校歴史学部教授。著書に『石の祭壇　ポンペイ島１８９０年までの歴史』『ミクロネシアの再建　太平洋統治領の開発論１９４４－１９８２』など。

ミクロネシアで成功を収めながら日本人として帰国せねばならなかった父親の内外での足跡も視野に置き、古くからミクロネシアに根付いた社会制度を尊重しながら、議会を創設し、国のあるべき姿を追うトシヲの視線に日本人的感性を感じさせて鮮やかだ。

隣国のパラオと同様に日系人が今も多く生活を送り、すぐれて親日的な心情を備えていることに一つの答えを与えるとともに、日本人に国家とは何かについて大きな示唆をもたらすものともなっている。

さらに広範な研究

《受賞の言葉》大変な名誉をいただきました。トシヲ・ナカヤマの物語が日本研究にとって意義があるとされたことに喜びを感じます。彼の生涯を追うことは、祖先からの日本とのつながり、日本と諸島の関係、そして島国としての日本のアイデンティティーを考えさせるものでした。この受賞を機に、近隣の大陸や国々との関係を含む太平洋の歴史について、さらに広範な研究を進めたいと思います。

《講評》髙池勝彦・国家基本問題研究所副理事長

ミクロネシア連邦はチューク諸島やヤップ、ポンペイなどからなり、西太平洋の広大な地域を占める。この地域は、1920年から45年まで、日本が、それ以前のスペイン、ドイツの統治の後を受けて、国際連盟の委任統治を行っていた。そして第二次世界大戦の激戦地となった所でもある。

本書は、日本統治以前と日本統治時代を分析し、日本の敗戦後、アメリカが行った国連の信託統治をも分析している。多くの日系人が活躍し、初代大統領となったトシヲ・ナカヤマが、利害の異なる多くの地域をいかにまとまりをもって独立させたのかを描いた緻密な研究書である。